

占領下日本における小学校理科教育の改革

—文部省係官と CIE 係官の交渉過程を中心として—

広島大学学校教育学部 柴 一 実

本研究は、文部省教科書局編修官の岡現次郎と CIE 教育課のヴィヴィアン・エドミストンの理科教育観や二人の人間関係が占領下日本における小学校理科教育の教育政策に、どのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とした。諸資料による文献研究の結果、次の諸点が認められた。(1)1946年9月から1949年2月まで在日したエドミストンは、理科教育関係以外にもさまざまな職務をこなしており、理科教育に関する実際の仕事は文部省の係官たちに委ねざるを得なかった。(2)エドミストンの会議録によれば、岡現次郎が理科研究中央委員会の活動を主導的にこなし、エドミストンはそれを承認していた。(3)エドミストンの職務の多忙さに起因する時間の制約という物理的条件と、岡とエドミストンが共通の理科教育観を有していたという人的条件が、小学校理科教育改革の交渉過程に少なからず影響を与えていた。

はじめに

戦後半世紀を経た今日、アメリカ側資料を用いて、占領下の日本における教育改革の実態や意義などを明らかにする研究が盛んに行われている。既に筆者は、教育課程文庫 (Textbook and Curriculum Library) 所収の米国教科書が『小学生の科学』(1949)の発行に与えた影響について論究した¹⁾。ところで、明星大学発行の『戦後教育史関係文献目録』(1996)²⁾には、先の視点から研究された論文が数多く取り上げられている。しかし、理科教育に関する研究はわずか10編掲載されているだけであり、しかもこれらの先行研究は、いずれも日本側資料に基づいて行われたものであり、米国側資料を用いた研究は見当たらない。

先行研究のうち、中村・田所(1988・1989)³⁾⁴⁾は、昭和22年の学習指導要領の成立過程や昭和23、24年の小学校理科教科書『小学生の科学』の作成過程についての詳細を、当時の文部省係官の証言などを織り込みながら論究している。両氏によって、『小学生の科学』の編集が民間情報教育局 (Civil Information and Education Section; 略称 CIE) 側から方法面での指導を受けながらも、基本的には日本側の主体的作業で進められたことが明らかにされている。だが、本当に日本側は改革をリードしていたのか。もしそうであるならば、

それはどのようなことに起因していたのか。

近年、ハリー・レイ (1991・1992)⁵⁾⁶⁾はわが国の占領期教育改革研究において、CIE 教育課員の態度や性格、教育観が文部省職員との交渉の場で彼らの行動を形成し、教育改革の中身に影響したことを指摘している。彼の主張点を理科教育の場合に当てはめてみると、日本側主体で改革が押し進められた大きな要因として考えられるのは、文部省側係官と CIE の教育課 (Education Division) 理科教育担当官との関係である。

文部省係官の中でも、とりわけ岡現次郎 (1901-84) の存在が大であったことが関係者らによって証言されている⁷⁾。すなわち、1946 (昭和21) 年8月から49 (昭和24) 年2月まで滞在した CIE 係官エドミストン (Vivian Edmiston Todd)⁸⁾ が、改革のイニシアティブを岡に任せる部分が多かったというのである。もし、エドミストンが岡に全幅の信頼を寄せていたとすると、それは岡のどの部分が影響したのか。

本稿の目的は、果たして日本側主体で理科教育改革が押し進められたのかという疑問点を解明することにある。そのために、岡現次郎と1946 (昭和21) 年9月から1949 (昭和24) 年2月まで、CIE 教育課の理科教育担当官であったエドミストンの関係に着目した。つまり、岡とエドミストンのどのような理科教育観が小学校理科教育の改革

政策に影響し、実際にどのように交渉が進展したのか、特に岡の理科研究中央委員会活動を中心として、交渉過程を実証的に跡づけることを目的としたものである。というのも、戦後初の小学校理科教科書『小学生の科学』（1949）作成に見られたように、理科研究中央委員会・地方委員会の活動は戦後の新理科教育にとって画期的な出来事であったからである。

なお、研究に当たって用いた資料は、GHQ/SCAP 文書中の CIE 文書などである。

I. エドミストンの理科教育観

CIE 教育課のカリキュラム専門官であったエドミストンは、アイダホ大学で化学を専攻し、シカゴ大学でカリキュラム研究を行って博士号 (Ph.D.)⁹⁾ を取得した。彼女は、理科教育に関して如何なる考え方を有していたのであろうか。

エドミストンは、1947（昭和22）年創刊の雑誌『科学と教育』に、巻頭論文を掲載している。同論文のタイトル名は「科学の新教授法 (Newer Methods of Science Teaching)」であり、英語で書かれ、日本語が併記されていた。論文の長さは英語で約6,700字、日本語で約2,800字であった¹⁰⁾。

エドミストンはこの論文の前半部分で、彼女の構想する理想的な理科指導モデルを示している。概要は次の通りである。

小学生の花子は、通学途上の渡し船で見た錨の巻き上げ機（車地）のことをクラスの前で発表した。彼女の担当の田中先生は花子のお話を聞きながら、「車軸と滑車の外に、斜面、くさび、ねじ及びこれについて理解させる」というこの学年の目標を思い浮かべ、渡し船の滑車やミシン、井戸などの滑車の実例を見学する計画を立てる。田中先生は子どもたちにカードに提案事項を記入させ、それに基づいて校外学習（教授）を計画する。実施に当たってはあらかじめ予備調査を行い、見学路上で子どもたちに見せたい簡単な器械について予備調査を行い、その有無について調べている。

田中先生は校外学習の計画に当たって、子どもたちを参加させることを忘れない。子ども側の参加者は、生徒委員会や車輪及び車軸に関す

る討論の席上、発言した次郎、討論に無関心であった栄子、転校生（新入生）などであった。

エドミストンは実践モデルを紹介しながら、新学習指導要領や新理科教授法の理念、精神を具体的に説明していた。

彼女の主張をまとめると、次の5点に要約できる。

- (1) 教師は子どもがイニシアティブを発揮し、責任をとるよう学習計画を立て、実施すること。
- (2) 教師は科学に関する子どもの個人的理解を発達させるとともに、科学的活動をクラス全体の児童が経験するよう計画を立てること。
- (3) 教師は子どもの理科学習の進捗状況を観察し、個人の成長を注意深く見守ること。
- (4) 児童の興味を理科学習の出発点とすること。
- (5) 子どもは実験、校外学習（教授）、参考書の研究などの活動を通して環境を探究し、この探究から科学的原理の一層の理解やそれらの日常生活への応用に到達すべきこと。そのために良き教師は子どもと共に学び、子どもが日頃出会う問題に対して、如何に科学的原理や法則が用いられているか、終始注意を払うこと。

エドミストンの構想する理想的理科学習とは、子どもが疑問や問題から出発し、彼らの身の回りに存在する日常生活場面から教材を選択することであった。子どもは実験、観察、校外見学、資料収集などの活動を通して問題解決を図り、科学的原理や法則に関する理解を深めると共に、それらの日常生活への応用面に関する知見を一層確かなものにするのであった。

II. 会議録に見られるエドミストンの職務

1. 1946年10月から49年2月までの会議録に見られるエドミストンの理科教育関係の職務と会議録に登場する文部省関係者

1946年10月から49年2月までのエドミストンの会議録 (Conference Report) を概観すると、彼女が出席した理科教育に係る会合は、次の(1)から(12)までの事項を審議したり、承認したり、報告を受けたりするために開催されたものであった。(1)理科教科書、(2)学習指導要領、(3)理科の評価、(4)委員会活動の評価、(5)理科教育全般、(6)理科カ

ウンセラーの仕事, (7)理科カリキュラムプロジェクト, (8)理科指導主事 (Science Consultant) の仕事, (9)理科単元の開発, (10)理科単元開発のためのガイドブック, (11)理科教育に関する中央委員会 (Advisory Committee), (12)教科書編修官 (The Science Text Compiler) の仕事¹¹⁾。

このように, 理科教育関係の職務だけを取り上げてみても, エドミストンが関与していた職務内容が如何に多岐にわたっていたかが分かる。それでは彼女は, これらの会合に出席し, 文部省の誰と会い, 何を審議していたのか。会議の席上, 彼女はどの程度自分の意思を示し, 文部省の方針に対してどのように示唆したり, 関与したりしていたのか。次にこれらの点について述べたい。

文部省の係官のうち, エドミストンが頻繁に会合した文部省理科教育関係者は, 同省教科書局第二編修課や科学教育課に所属していた次のような人達であった。教科書局第二編修課長事務官 (大島文義), 同事務官 (岡現次郎, 永田義夫, 谷口孝光, 大橋秀雄, 関利一郎), 科学教育課事務官

(稲沼端徳)¹²⁾。

2. 1946年10月から47年7月までの会議録に見られるエドミストンの理科教育関係の職務

1946年10月から47年7月までの会議録を調査し, 理科教育関係の会議を取り上げると, 表1のようになる。なお, 括弧の中の氏名はエドミストンと会った文部省関係者を示している¹³⁾。

とりわけ, エドミストンが頻繁に会合を持っていたのは教科書局第二編修課事務官, 岡現次郎であった。エドミストンと岡との会合は, 1946年10月から47年7月まで17回, 47年7月から49年2月までで54回。2年4ヶ月の間に71回に及んだ。

III. 岡現次郎の理科教育観

岡現次郎の経歴については, 注¹⁴⁾に取り上げている。ところで岡は, 理科教育に対してどのような考え方を有していたのか。この点について, 岡は雑誌『科学と教育』創刊号 (1947) の中で, 次

表1 エドミストンと文部省側係官との会合内容及び会合日, 会合回数

会 合 内 容	文部省係官との会合日	会合回数
理 科 教 科 書	'46.10.21(大島, 岡, 稲沼, 大橋), 10.29(大島, 岡, 稲沼, 谷口, 永田), 11.4(岡), 11.12(大島, 岡, 稲沼, 永田, 谷口), 11.14(岡, 大島, 永田, 谷口), 11.26(岡), 11.29(青木), 12.6(岡), 12.16(大島), '47.1.7(岡), 1.8(大島), 1.28, 2.4(永田), 2.6(岡), 2.14(永田), 2.18(岡), 2.25(大島, 谷口, 大橋), 3.5(岡, 永田), 3.22	20
理 科 教 育 全 般	'46.10.16(大島, 岡, 谷口, 永田, 稲沼), 12.4(大島), 12.6(渡辺), 12.13(大島他), '47.1.8(永田), 2.17, 2.25(古沢), 2.28, 3.13(久保他), 5.13(大橋他), 5.16, 5.20(永田, 大橋), 5.21(坂元他), 6.14(渡辺他), 6.17(東京都の小学校教師), 6.19(岡田), 6.26(藤沢他), 7.3, 7.7(坂本他)	19
学 習 指 導 要 領	'46.10.21(大島, 岡, 稲沼, 大橋), 11.26(岡), '47.2.14(青木), 2.25(岡), 5.13(大島, 岡, 永田, 大橋), 5.21(青木)	6
理科研究中央委員会	'47.6.27(岡)	1
理 科 単 元 開 発	'47.6.28(木田)	1

のように述べていた。

「理科では、自分で疑問を持って、確かめたり、考えてみたりして、自分で納得のできる正しいことを求めるという科学的な態度を養っております。……1. 科学的に物事を取扱う能力 2. 科学の真理とそれを応用した科学的知識 3. 真理を求め、つかんだ真理に従い、さらに新たなものを創造しようとする科学的態度 この3つの科学的な能力、知識、態度はぜひ持っているてはならないものだと思います。……（中略）……このような日常生活上の問題を、科学的に解決して行くのが理科の教育でなければなりません。」¹⁵⁾

このように、岡は戦後の新理科教育の目標として、(1)実生活に関する問題を合理的に解決するための科学的能力を身につけること、(2)科学の真理とその応用に関する科学的知識を獲得させること、(3)真理を希求する科学的態度を育成すること、を強く主張した。これらの目標を実現すべく、教師は文部省からのお仕着せを模倣するのではなく、授業を創意工夫することを岡は強く求めたのである。

岡とエドミストンの理科教育観は、共に問題解決理科、生活単元理科であり、岡とエドミストンの理科教育観には、共通部分が多かったことが分かる。

IV. 理科研究中央委員会の活動とエドミストンの係わり

1947年4月から48年1月まで、エドミストンの会議録に見られる中央委員会(Advisory Committee)について記録している箇所は21カ所に及んだ。会議録の日付は次の通りである。1947年6月24・27日、7月8・15・22・24・30日、8月12・20・27日、9月2日、10月1・13・15・27・30日、11月10・30日、12月20日、1948年1月14日。

先に述べたように、エドミストンはCIEのカリキュラム専門官として煩雑な職務内容をこなし、多忙を極めていた。こうした状況下で彼女は、理科教育に関する政策決定に関して、文部省関係者らとどのような協議を行い、どの程度彼女の意思

を示していたのか。次に、これらの点について明らかにしたい。

1. エドミストンは中央委員会の活動とどのように係わったか

理科研究中央委員会のメンバー選定に関する記述は、1947(昭和22)年6月24、27日付の会議録に見られる。6月24日付の会議録には、次のように記録されていた¹⁶⁾。

「岡は、理科カリキュラムに関する中央委員会を構成する25名のリストを書き出した。小学校長3名、男性小学校教員10名、女性小学校教員3名、中学校長1名、中学校教員1名、視学官2名、師範学校教授3名、大学教授2名。」

文部省教科書局第二編修課、岡現次郎が25名の中央委員会委員をリストアップしたことが分かる。さらに3日後の6月27日付の会議録には、次のように記されていた。

「岡は科学カリキュラムに関する中央委員会委員の氏名リストを提出した。彼は連絡網まで作成していた。第1回目の会合は7月10日に開催されるであろう。岡は声明書(statement)を作成し、毎週の会合に大いに期待していた。第1回目の会合は集合に便利な場所である日本書籍株式会社で開催されるであろう。」¹⁷⁾

岡は委員の連絡網や声明文まで作成し、中央委員会に期する所が大であった。

実際、文部省より任命された中央委員会のメンバーは、小学校長2名、男性小学校教員9名、女性小学校教員2名、中学校長1名、中学校教員1名、大学教授2名、師範学校教授3名、視学官1名、研究団体2名の総勢23名であった¹⁸⁾。当初予定されていたよりも、小学校教員が2名少なく選定されていた。これらのメンバーに文部省から岡、永田義夫、谷口孝光、大橋秀雄、山本武子が加わり、委員会の議長を岡が務めた。

中央委員会は、メンバーがリストアップされてから、わずか2週間あまりで発足しており、メンバーの選定はほとんど岡の構想通りに行われており、エドミストンの関与は認められない。

先の中央委員会の諸活動に関しては、岡を中心とした文部省側が主導しており、エドミストンは側面的援助を行っていたに過ぎなかった。

1947年6月24日にエドミストンは、文部省教科書局長、稲田清助と会合した。同日付の会議録には、次のように記されている。

「各編修官 (Compiler) は、夏期講習 (summer sessions) やワークショップ (workshops), 講習会 (institutes), その他の集会について、あまり知らない。編修官は、各教科目の教授に関する疑問解決の可能性を秘めている。だが、稲田はこのことに思いを馳せていない。1年のうちに、編修官が各教科の熱心な教師を支援したり、教員集会に参加したりすることは可能となるであろう。」¹⁹⁾

当時、エドミストンは、日本各地で開催されていた理科の夏期講習やワークショップ、講習会、その他の集会に、岡ら文部省理科教科書編修官を参加させることの必要性を、岡の上司である稲田清助教科書局長に説いていた。

またエドミストンは、1947年7月8日付の会議録において、次のように記していた²⁰⁾。

「理科カリキュラムに関する中央委員会の第1回会議についての話し合いがもたれ、記録された。最初の会合は日本書籍株式会社で開催されるであろう。引き続いて、会合が文部省主催で銀座近くの図書館で開かれるであろう。

アメリカのスcott・フォーレスマン・アンド・カンパニー (Scott-Foresman and Company) より送られた教材は、中央委員会にとって最も役に立つであろう。岡は最初の会合に、この教材やアメリカの教科書の見本を持参するであろう。」

1947年7月10日の中央委員会結成第1回会議の席上、エドミストンはアメリカから取り寄せた教材や理科教科書を参考として提示するために、岡にこれらの物品を供与していた。

1947年9月30日付の会議録には次のように記録されていた。

「金曜日から始まる秋田での『理科教員集会 (The meeting of science teachers) 』に出席するためには、岡は水曜日の晩に出発する必要がある。しかしながら、不幸にもこの時期、文部省を含めて公務員の特別切符は支給されていない。が、台風の被害が甚大で、座席に空きがある。我々の課 (CIE 教育課) 発行のメモ

は、岡が切符を購入するのを手助けするであろう。」²¹⁾

こうしてエドミストンは、秋田での理科教員集会に岡が参加できるよう、切符の手配の便宜を図っていた。

このような中央委員会の活動に見られたように、会合のイニシアティブは岡を中心とした文部省側が取っており、エドミストンは側面的援助を行っていたに過ぎない。側面的援助として、彼女は上述のごとく、アメリカの教材や教科書を提供したり、岡ら教科書編修官を全国の講習会や教員集会等に参加させるよう上司に進言したり、旅行に必要な切符の購入に便宜を図ったりした。これらの活動を通してエドミストンは、中央委員会が十全に活動できるための条件整備を行うという役割を果たしたのである。

2. エドミストンは中央委員会の活動をどのように評価したのか

1947年9月2日付の会議録には、「理科編修官は週末も休むことなく働き、中央委員会で開発された理解に関する事項の英訳を行っている。『地球と空』、『機械と道具』領域の理解事項は完成したものであり、大変良いように思われる。」²²⁾と記されている。翌1948年 (昭和23) 年、理科研究中央委員会によって、『小学校理科教育の指導及び理解の目標』が発行されるが、これをまとめる作業段階での活動について、エドミストンは肯定的な評価を下していた。

また1947年10月1日付の会議録には、「岡によって執筆された『生物はどのように育つか』という単元は見事なもので改善点は、極めて少ない。」²³⁾と記録されていた。ここで取り上げられている『生物はどのように育つか』という単元とは、小学校理科教科書『小学生の科学』の第4学年用として、岡、小川浩の中央委員会メンバーによって執筆・編集されつつあった単元である。ここでもエドミストンは、岡の活動について肯定的な評価を行っていた。

このようにエドミストンは、岡らによって行われていた中央委員会の活動について、折に触れて賛同の意を表していた。

V. 考察—岡現次郎とエドミストン

以上の研究結果を踏まえ、次に考察を加えたい。

第一に、1946年10月から47年7月までのエドミストンの会議録によると、彼女が理科教育関係以外の仕事を精力的にこなしていたことが分かる。これらは教師教育、中等学校の入学試験、師範学校のカリキュラム改正、英語の教科書及び学習指導要領、音楽の教科書、教育心理学研究、統計数学機関、附属学校、学習指導要領の紹介集会などに関するものであり、彼女の職務は広範囲にわたっていた²⁴⁾。それ故、彼女は理科教育の指導に十分な時間を当てることができなかったのではないかと推測される。1946(昭和21)年から47(昭和22)年の期間、日本に滞在していたCIE係官はハークネス(Harkness, Kenneth M.)、ヘファナン(Heffernan, H.)、カーレー(Carley, V. A.)、エドミストンなどであった。CIE教育課は、日本の約1800万人の生徒、4万6千校の学校、55万6千人の教師に責任を負っているという事実が存在するにも拘わらず、課員は占領第一次以降平均30人しかいなかった²⁵⁾。従って、CIE教育課長補佐トレイナー(Trainor, Joseph C.)は、「教育課は日本側に望ましい指導と助言を与えるには全く小さすぎる集団というべきであった」²⁶⁾と見なしていた。教育課の専門係官の人数は極めて不足しており、エドミストン自身の職務は多忙を極めていた²⁷⁾。一方、1947(昭和22)年8月1日の時点で、文部省では森戸辰男文部大臣以下、593名の職員が勤務していた²⁸⁾。文部省とCIE教育課の職員数の差は歴然としていた。少ない時間を割いて、エドミストンは学習指導要領作成から教科書づくりまで、広汎な理科教育関係の仕事をごささねばならなかった。これらの職務を十全にこなすためには、十分な時間の保証が必要であり、限られた時間の中では、たとえ有能な彼女であっても、岡をはじめとする文部省関係者に実際的な仕事を委ねざるを得なかったのではないかと推測される。

第二に、エドミストンは文部省の理科教育関係者の中でも、とりわけ教科書編修官、岡現次郎と頻りに会合を持っており、1946年10月から49年2月までで、その回数は71回に及んでいた。岡は戦前から文部省に在職し、「自然の観察」作成に関

与したキャリアの持ち主であった。理科学研究中央委員会での活動を例にとると、岡が主導的に仕事をこなし、エドミストンがそれを承認するという構図が見えてくる。

第三に、エドミストンの会議録には表題を付された内容以外のものも含まれており、理科学研究中央委員会に関する報告も、多くの異なった表題のついた文書に記載されていた。中央委員会とエドミストンとの関係について言えば、中央委員会のメンバー選定は、ほとんど岡の構想通りに進められ、エドミストンの関与は認められない。多忙な職務を強いられていた彼女は、貴重な時間を割いて、中央委員会が十全な活動をできるように側面から援助し、条件整備を行った。彼女は教科書編修官の働きぶりを高く評価していた。中央委員会が中心になって推進していた教科書編纂についても、彼女は岡の仕事ぶりを概ね認めていた。

第四に、当時は地方と中央との強い連携が図られていた。小学校理科教科書『小学生の科学』第4学年用原案は、中央委員会によって作成された。同委員会は地区委員会が第5、6学年の教科書を作成する際の参考として、原案を提示した。加えて、岡をはじめとする教科書編修官が説明のために全国へ派遣された。中央委員会と地方委員会による共同での教科書作成作業は、教科書内容に現場の声を反映させる地方分権的、民主的システムとしてうまく機能していった。岡は1946(昭和21)年、第一次米国対日教育使節団報告書を読み、教科書が国定から民間編纂へ移行することを諒解した²⁹⁾。民間による教科書編纂には現場教師と学者との協力が必要であると考え、有能な教師を育成するというねらいから、理科学研究中央・地方委員会制度を発足させたのである³⁰⁾。

おわりに

本稿では、主に米国側資料を用いて、連合軍最高司令部(GHQ/SCAP)、CIE教育課係官、エドミストンの仕事内容や多忙さ、経歴などを明らかにした。加えて、文部省教科書編修官、岡現次郎とエドミストンの理科教育観も明らかにし、二人が似通った価値観を有していたことを明確にした。エドミストンの職務の多忙さに起因する時間

の制約という物理的条件と、岡とエドミストンが共通の理科教育観を有していたという人的条件が、小学校理科教育改革の交渉過程に少なからず影響を与えたことが分かる。しかし、理科研究中央委員会が教科書作成に具体的にどのように関わったのかなど、なお不明確な点が散在している。これらの詳細について明らかにすることが、今後の課題として残された。

注及び引用文献

- 1) 柴一実, (1997); 「小学校理科教科書『小学生の科学』の作成と教育課程文庫－5年生の単元「音」を中心として」, 日本理科教育学会研究紀要, Vol. 37, No. 3, pp. 35-45.
- 2) 明星大学戦後教育史研究センター, (1996); 「戦後教育史関係文献目録」, 戦後教育史研究紀要, 第11号, pp. 136-202.
- 3) 中村重太・田所美仁, (1988); 「戦後初期の初等理科教育の成立過程に関する基礎研究(その1)」, 日本理科教育学会研究紀要, Vol. 29, No. 1, pp. 39-50.
- 4) 中村重太・田所美仁, (1989); 「戦後初期の初等理科教育の成立過程に関する基礎研究(その2)」, 日本理科教育学会研究紀要, Vol. 30, No. 1, pp. 47-56.
- 5) ハリー・レイ著勝岡寛次訳, (1992); 「教育課長の個性並びに人生観が教育課の組織及び教育改革に及ぼした影響」, 戦後教育史研究, 第8号.
- 6) ハリー・レイ著勝岡寛次訳, (1993); 「CIE教育課員の態度・性格・教育観が教育改革に果たした役割について」, 戦後教育史研究, 第9号.
- 7) 大日本図書教育研究室, (1985); 「岡現次郎と理科教育」, 大日本図書教育研究室紀要, 第8501号, p. 52.
- 8) エドミストン (Vivian Edmiston Todd) の経歴は次の通りである。

彼女は1912年2月18日にワシントンの Spokane で生まれた。弁護士であった父ロバート・リー・エドミストン (Robert Lee Edmiston) と母スー・エドミストン (Sue Edmiston) との間の娘として誕生した。1931年にアイダホ大学

卒業, 理学士 (化学専攻)。その後, 1932年から39年まで公立学校教師を勤めた。1939年から41年まで, シカゴ大学教育学部で研究助手 (research assistant), 1941年から42年までコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの研究準教授 (research associate), 1942年から44年まで「ニューヨーク州の単科・総合大学協会 (Association of Colleges and Universities of New York State)」顧問を務めた。1943年にはシカゴ大学で博士号 (Ph.D.) を取得した。彼女の学位論文のタイトルは, 『ミルウォーキー州立大学における統合された専門カリキュラムの評価 (An Evaluation of the Integrated Professional Curriculum at Milwaukee State Teachers College)』であった。1944年から46年までニューヨーク州教育局 (Department of Education) の研究視学官 (supervisor of research), 1946年から49年まで, 日本の東京で「連合軍最高司令部 (Supreme Command of Allied Powers)」の「カリキュラム専門官 (curriculum specialist)」を努めた。1946年, エドミストンはニューヨーク州教育局の視学官として勤務していた。同教育局で州教育長 (Commissioner of Education) の地位に就いていたのが, 1946 (昭和21) 年に来日した第一次米国対日教育使節団長ストッダード博士 (Dr. George Stoddard) であった。日本での視察を終え, アメリカに帰国した彼は, 日本の実情をエドミストンらを前にして語り, 日本の教育改革に参加するよう要請を行った。エドミストンは彼の要求を受け入れ, 1946 (昭和21) 年9月中旬に来日し, CIE 教育課に着任したのである。

日本から帰国後, 1949年12月18日, 機械エンジニアであったレオナルド・クリスマン・トッド (Leonard Chrisman Todd) と結婚。彼女は1949年以降, 「民間教育専門家及び顧問 (private education specialist and consultant)」の職にあった。この間, 1962年から63年にかけてはカリフォルニア州立大学の顧問を務めたり, アイダホ研究財団及びアイダホ大学出版の副会長を務めた。エドミストンはアイダホ大学から教育学の名誉学位を授与され, 教育界における

彼女の貢献が認められた。(James M. Ethridge and Barbara Kopala ed., (1967); *Contemporary Authors Volumes 17-18*, p. 394.)

9) エドミストンの博士論文のタイトルは、『ミルウォーキー州立大学における統合された専門カリキュラムの評価 (An Evaluation of the Integrated Professional Curriculum at Milwaukee State Teachers College)』(1943)であった。同論文は、ミルウォーキー州立大学で実施されていた幼稚園及び小学校教員養成のための統合プログラムに関する評価研究であった。同大学では3年次の後学期から4年次の前学期にかけて、教育実習 (practice training) を行っていた。この教育実習プログラムは、教育に関する理論と実践を統合するという意味で、統合プログラムと呼ばれていた。エドミストンは統合プログラムの有効性を評価するために、目標の明確化、評価基準の開発などを博士論文において行った。研究過程において得られた知見が、日本での理科教育の指導に少なからず役立ったと思われる。

10) ヴィヴィアン・エドミストン女史, (1947); 「科学の新教授法」, 科学と教育, 第1集, pp. 1-3.

11) *GHQ/SCAP Records*, Box no. 5358.

12) 教育事情調査研究所, (1947); 「文部省職員録」, pp. 21-22.

13) *GHQ/SCAP Records*, Box no. 5358.

14) 岡現次郎の経歴は次の通りである。

岡現次郎 (1901-84) は1901 (明治34) 年、四国松山に生まれる。郷里の小・中学校を経て、1918 (大正7) 年、旧制松山高等学校理科乙類を経て、1923 (大正12) 年、東京帝国大学理学部植物学科に入学する。1926 (大正15) 年、卒業と同時に大学院に進み、1927 (昭和2) 年、助手となる。1938 (昭和13) 年、文部省図書監修官となり、1941 (昭和16) 年発行の『自然の観察』などの編修の任に当たった。

戦後も文部省に残り、教科書第二編修課に勤務し、1947 (昭和22) 年、『学習指導要領』,

『私たちの科学』の編纂を行った。同年、岡は「理科研究中央委員会」, 「地方理科研究委員会」を組織し、『小学生の科学』の編纂に当たった。1952 (昭和27) 年、初等中等教育局視学官となり、理科教育振興法の制定に尽力し、1954 (昭和29) 年、『理科教育の進路』をまとめた。1955 (昭和30) 年、文部省を引退。その後、大日本図書株式会社の編集顧問などを務めた。1984 (昭和59) 年、死去。(大日本図書教育研究室, 前掲書, pp. 5-6.)

15) 岡現次郎, (1947); 「理科指導の新しい方向」, 科学と教育, 第1集, p. 36.

16) *GHQ/SCAP Records*, Box no. 5358.

17) *Ibid.*

18) 大日本図書教育研究室, 前掲書, p. 11.

19) *GHQ/SCAP Records*, Box no. 5358.

20) *Ibid.*

21) *Ibid.*

22) *Ibid.*

23) *Ibid.*

24) *Ibid.*

25) ハリー・レイ著勝岡寛次訳, (1992); 前掲書, p. 30.

26) 同上書, p. 30.

27) ハリー・レイはエドミストンの仕事ぶりについて、「エドミストンはしばしば報告書を書かず、彼女の行動を充分調整しないというので (CIE 教育課長オアから) 注意を受けねばならなかった」(ハリー・レイ著勝岡寛次訳, (1992); 前掲書, p. 43.) と記述している。だが、これもエドミストンの職務の多忙さの所以ではなかろうか。

28) 1947 (昭和22) 年発行の「文部省職員録」(教育事情調査研究所) より、全体の人数を算出した。

29) 岡現次郎, (1974); 「日本の理科教育史の概要」, 理科の教育, Vol. 23, No. 6, p. 62.

30) 岡現次郎, (1959); 「戦後の理科教科書編集」, 理科教室, Vol. 2, No. 7, p. 16.

The Reformation of Elementary School Science Education in Occupied Japan:
The Process of Connection of the Officer of the Ministry of Education
with the Specialist of Education Division in the C. I. E.

by

Kazumi SHIBA
The Faculty of School Education, Hiroshima University

The purpose of this paper was to clarify how the views about science education and human relations of Genjiro Oka, a science text compiler of the Ministry of Education and Vivian Edmiston Todd, a specialist of Education Division in the C.I.E., had influence on the education policies about elementary school science education in occupied Japan. Through the study of documentary records, the results were as follows:

- 1) Edmiston, having stayed in Japan from September 1946 to February 1949, was able to discharge various duties related to science education and she could not help entrusting the practical works for science education to officers of the Ministry of Education.
- 2) In a conference report she prepared, Edmiston stated that Oka worked mainly at the Advisory Science Committee, and both of them seemingly agreed on various aspects.
- 3) Influence upon the process of connection between Oka and Edmiston was limited since the physical condition of time resulting from her busy job and the human condition to both of them had caused their acquisition of common views about science education.